書評

日本放送協会編「ことばの研究室」

宮地裕

これは、たいへんたのしいよみものである。この書評――とはいゝながら、紹介を主とした感想――を、かくために、五冊つづけてよんでみて、ほとんど、よみあきることがなかったが、かんがえてみると、その原因は、ひとつには、もちろん、豊富多彩な内容のために、であるが、またひとつには、その文章自体のもっているおもしろさのために、であるとおもわれる。内容にひきつけられながら、一方では、文章自体について、おもしろく、また、つぎつぎに、かんがえさせられていたのである。

だいたい、このシリーズは、第二次大戦後まもなく、昭和二十二年十月から、NHKがはじめた「言葉の研究室」の時間のうちで、昭和二十八年から二十九年十二月までの放送を編集して、二十九年一月から、三十年三月までのあいだに、五冊の本として刊行したものであって、この戦後十年、という、いろいろな意味での、社会の激変期にあたってわれわれの国語における問題を、なんとかして、すこしずつ、ときほぐしてゆこうとする、まじめな努力の、ひとつのあらわれである、ということができるだろう。わが国の中世の戦乱が、もし日本語の変遷にひとつの大きな時期を劃させたとすれば、太平洋戦争の敗北は、おそらく、明治の維新とともに、現代日本語を前代から区別させる契機となるにちがいない。このときに、このような放送がおこなわれ、さらに、それらが単行本として刊行されたということ、そのうえ、それらすべてが、大衆から好評をもって、むかえられた、ということは、偶然ではない。またこのような理解のもとでの、戦後、というような特殊な条件を、いちおうかんがえないとしても、昭和二十年代という一世代の期間の日本語を、この時代のひとびとが、どのようにかんがえ、どのように、よりよいものと、しようとしていたか、という、その態度と努力とを、はっきり、われわれは、よみとることができるのであり、また、これを、未来のひとびとに、本としてのこすことができるのである。しかも、それは、一個人の観察やかんがえではなくて多少、特殊なひとびととともいえようが、かぞえてみれば、のべ七十数人というおおくのひとびとの、観察やかんがえによるところの、日本語なのである。それだけ、かたよらない態度として、理解しても、まず、よいものと、いえるであろう。

おもえば、これだけ、おおくのひとびとが、まっすぐに、まじめに、ことばの問題について、わかりやすく、はなしてきかせてくれ、よましてくれる、そんな機会は、やはり、えがたいものであると、おもわれる。だから、百年前に、これほどの反省と、これほどの熱意とが、当時のことばについて、はらわれていて、書物として、のこされていたなら、どれほど、すばらしいであろう、と、われわれは、おもわないで

はいられない。二百年まえ、三百年まえのものも、のこされていたら、さぞすばらしいであろう。その意味で、「百年後の日本語」の予想を、はなしあっておられる(V)のにも、興味をそそられる。その予想が、あたるか、あたらないかは、別問題として、百年後に、このシリーズを、とりあげて、よむひとは、じぶんの父祖たちが、どれほどの努力を、じぶんたちのことばのために、一日一日、はらってくれていたかを、はっきりと、みにしみて、感じとるだろう。この五冊の本は、じぶんたちのことばで、かたりかけており、じぶんたちのことばを、かたりあっているのだから。

さて、編集についていえば、この五冊は、各冊のまえがきによっても、わかるように、ほぼ放送された順序に、出版されているのではあるが、ところどころ、内容にしたがって編集しなおされていて、時間的には、かならずしも、順をおっていないところがある。文章も、ほぼ、録音したままに、文字化したもののようであるけれども、第五巻のまえがきには、「放送されたものに充分な加筆訂正を願ってまとめたものであります」とも、あるように、なまの録音の文字化ではない。はなはだしいのは、第三巻に、「である」体の文章が、五つもあり、第五巻には、「左横書」が一つある。これらは、個人の意志を尊重しなければならなかったのか、自由にすべきだというかんがえであるのか、意図は別としても、やはり、一冊の本として、統一がないことは、いささか、よみにくいものだと感じさせられる。五冊の本として、出版するための考慮が、順序やまとめなどだけでなく文章自体にもはらわれているようであるから、ここも、もう一歩、統一がほしいところだとおもう。

一冊ずつの内容からいえば、この五冊は、日本語の過去について(III言葉の由来)、また、将来について(Vあすの日本語)、かたっているばかりでなく、現在についてこそ、もっともおおく、かたっている。すなわち、われわれの、いま、つかっていることばは、どういうところがその特徴である、といえるか(I日本語の特色)、それをわれわれは、現に、どのようにつかっているのか(II日本人の言語生活)、そして、そのもっともただしいつかいかたとは、どんなものか(III正しい表現)、ということを、かたっている。だから、現在が、過去をうけながら、将来にむかって、うつりかわってゆく、この歴史のながれのなかで、現在というものを、的確に、日本語においてとらえようとしている、とおもわれるのである。もちろん、編者(あるいは編者たち)が、どの程度、このシリーズ全体への、みとおしを、最初から、つけていられたのか、また、それが、どの程度、実現されたのか、わたくしは、しらない。放送、「言葉の研究室」についても、同様、その点は、しらない。しかし、一読者として、一聴取者としてのわたくしには、具体的現実としての観察と考察のかずかずが、このように、全体として、まとめあげられたこと自体に、興味がある。一つ一つの事実について、かぎりないぐらい、つぎつぎに、かんがえさせられていたけれども、それ以上に、現在を、このようにとらえたすがたとして、このシリーズ全体がまとめられた(あるいは、自然に、まとまった)ということ自体に、興味がある。あるいは、より明細刻明に、現在をかたること以上に、意味のあることであると、おもわれる。それは、この変動期における日本語を、ちからづよく、一歩、よ

りよい方向へ、おしすすめようとする、真剣な努力である。そして、実践的な旺盛な意慾からうまれた多数のひとびとの、いわば、全体としての、直観的洞察なのか、とさえおもわれる。

さて、このシリーズは、その目的からいえば、おそらく、啓蒙であり、いきいきとした国語教育であり、反省のための資料と意見の提示などであろう。どういうところが、現代日本語の問題点であり、どういうところが改善されなければいけないのか、どうすればいゝかをみんなでかんがえあっているのである。その意味では、これは、すぐれた表現と効果を持っている。ゆたかな知識をもつひとびとが、熱意をもって、かたりかける、その技術の、多少のうまいまずいを、問題にしすぎてはいけない。しかし、技術をもふくめて、目的のための表現、という点から、このシリーズを、みてみよう。すぐれた点は、さきにもふれたように、まず、わかりやすいことであって、それは、日常談話、あるいは、日常会話の形式を、主としているばかりでなく、首尾をととのえ、だいたい十五分の時間のわくのなかで、一つのテーマについて、いちおう、はっきりした意見なり、結論なりを、しめしてみせることに、おおきな努力が、はらわれていることによるもの、とおもわれる。たとえば、

——今日は、限定の表現といったような問題からお話を伺いたいと存じます。

という、テーマのきりだしからはじまって、

——それでは、結論の方へどうぞ。

という、むすびでおわる。アナウンサー、あるいは司会者の用意とともに、出演者たちの準備も、かぎられた時間のなかでの教室の授業の見本のようなものである。録音テープ自体にも編集があったろうし、出版にあたっての加筆訂補もあったかもしれないが、これはこれで、十分、意味のあるものであり、国語教育の現場のひとびとの、参考とするにたりるものである。「日本人の挨拶」（Ⅱ所収）のおわりのところなどには、

——わかりました。先生もう時間がきましたから、このへんで……。どうもありがとうございました。

金田一　どうも失礼しました……。これは日本的でしたな。（笑声）

と、落ちまでついている周利さによってひとびとは、理解の快感をおぼえながら、よみすすむことが、できる。同時に、だいたい、はなしことばのままに、文字化されたために、よみことばとしては、へんだナとおもわれる、という結果を、まねいている例も、

……。上手に話を持って行き方ですが、物を売りに行ったセールスマンは、……（Ⅱ、一八七頁）

のように、ところどころ、ある。けれども、これは、おもったよりは、ずっとすくなくて、かえってわたくし個人としては、残念におもったほどである。

また、適切な具体例から、かんがえさせる努力をはらい、また、主義主張に偏した独断を、さけている点など、啓蒙のための表現に、十分な配慮が、みとめられることは、やはり長所として、あげられねばならないであろう。

要するに、穏健な啓蒙の意図を、よく、はたし、この、現代という時代の感覚を、的確に、日本語において、とらえたシリーズということができようか。

さらに一個人の希望をのべるなら、一つには、（例外ももるけれど）出演者たちがやや、学者・教育者というひとびとに、かたよりすぎているのではないか、とおもわれることで、落語家、代議士、新聞関係のひと、たたきうり屋、セールスマンなど、むしろこの「研究室」が、対象としてとりあげたひとびと自身に、しゃべらせることろみも、あってよくはないか。それはかえって、反省のともなわない実践であることがおおいゆえに、整理された表現と、なりにくいではあろうが、一層具体的であり、理論の実践のむずかしさも、わかることであろう。また二つには、ことばに関係のある機械について、ふれられることがすくなかったのは、まことに残念で、これについては、将来の非常な進歩が、すでに予想されている（V所収「百年後の日本語」）のだから、相当のスペースを、もちいてもよいのではあるまいか。実物をみせなくては、わかりにくいこともあろうが、それは、すでに、現代では、機械だけの問題でなく、ことば自体の問題であり、言語生活の問題となってきているのだから。また三つには、偏向をさける意図はおもんじなければならないが、たとえば、ローマ字論、カナモジ論、かたかな論、エスペラント語などの主義主張のあらましを、あるいは座談討論の形式などによってでも、ふれておいたほうが、よくはなかったか、とおもう。その概略が、一般のひとびとに、のみこめていることは、むしろ、真の啓蒙となろうから。また創作家たち（詩人、歌人、俳人、小説家など）と教育者たちとの対談も、ほしいものだとおもう。テーマを特定のものとすれば、まとめることも、できるのではあるまいか。また、四つには、いわゆる、言語哲学のような、言語の直観的把握についても、二三の見解が、そのみちのひとびとによってのべられていたら、かえって、ほかとの対比で、おもしろくはないか、とおもう。もちろん、一回かぎりの、放送のつかみかさねでは、なかなか困難でもあろうが、シリーズとしての出版にあたっては、考慮されてもよいことではあるまいか。また五つには、日本語の系統論の概略も、専門家から、一度まとめて、のべておいてほしかった。これは国語学にしたがうものどもに、一般のひとびとがたずねることの、もっともおおい問題のひとつだから。また六つには、参考文献のおもなものを、各項目に応じて、あげておいたほうが、便利であるとおもう。本文のなかにも、たとえば、

これについて K.Bühler という学者が興味ある説明をしています。……（Ⅱ　二二四頁）

……こういう、言い方の定まっていないものを集めた「現代語法の諸問題」という本があって……（Ⅳ、二二七頁）

などと、のべられたり、註としても、

1、たとえば服部四郎「音声学」（岩波全書）7.3.3 を参照（Ⅰ　二五五頁）

……エスペルセン「人類と言語」……（須見、真鍋氏の訳による）……（Ⅳ　二二九頁）

などと、わずかばかり、しるされたりするのであるから、いっそ、きちんと、あげてあるほうが、よくはないか。参考文献は、やはり、一般のひとびとが、自分自身のちからで、多少とも文献をよみ、しらべ、かんがえてゆくことのでるちからとなるであろうし、啓蒙の意図も、かくて、さらによく、はたしうるだろうから。また、七つには、本とすることに関しての注意が、と

ころどころ、たりないところがあると、おもわれるのは残念である。多少の誤植とともに、テープから文字化したときの、ちょっとしたあやまりか（Ⅱ二三頁・七六頁――のつかい方）とおもわれるところや、カタカナのつかいかた、たとえば「ロマンチック……セックス……」のすぐあとは「ヒマとユトリ……オショク」と、くると、（Ⅱ一三一頁）なにか外国語かと、一瞬とまどう。ふりがなを、さけるならば、むしろ、ひらがなに圏点でもうっておいたほうが、いいかもしれない。また、Ⅱの表紙カバーおりかえしの、みじかい宣伝文は、第三巻のためのものであり、表紙カバーにはあるが第二巻の本の背には、Ⅱの符号がぬけている、など、ちいさいことだが、注意がのぞましい。

慾をいえば、きりがない、以上、七つの希望は、全体としての「ことばの研究室」シリーズ五冊に対する、一般的な希望である。この、ささやかな希望が啓蒙と実践への、ひとつの助言ともなれば、さいわいであり、このシリーズ「研究室」を愛した、おおくの聴取者読者のなかの、ひとりの意見として、理解されれば、十分なのである。つまり、放送「研究室」に拍手をおくり、好意をもって、この「研究室」五冊をむかえた、かずおおくの大衆の動向を、編者たちが、しっかり、つかまえられるたよりとなりえたなら望外のさいわいである。

――西京大学助教授――

（東京都文京区音羽三ノ十九　講談社　各冊二六〇円）